

現代英語における擬似部分構造—構文の拡張—

Pseudopartitive Construction in English: Constructional Extensions

梶田幸栄
KAJITA Sachie

要旨 本稿では、現代英語の擬似部分構造 (Det N_1 of N_2 という形式の数量表現) がその基本形から多様な変種を派生していく過程を記述する。単純な語彙的拡張のほかに、比喻を伴う語用論的拡張、附属形式を付加する形態論的拡張、複数の構文が相互に影響しあう統語論的拡張などが観察される。統語論的拡張には、他動詞＋目的語構文からの数段階の拡張、主語＋非対格自動詞構文の名詞化、「名詞＋前置詞／接続詞＋名詞」構文の N_1 への代入などがある。さらに、 N_1 の前に修飾語句を付加して数量の意味をより精確にしたり、数量に関する判断の保留を表現したりすることもできる。 N_1 前の修飾語句は N_1 にかかる場合と N_2 にかかる場合の両方があり、その意味と用法は構文拡張の経路によって異なる。このような構文拡張の結果として、現代英語は数量という意味領域において非常に豊かな表現力を持つことになる。

1. はじめに

英語には(1)のような擬似部分構造 (pseudopartitive construction) と呼ばれる構造がある (Selkirk (1977), Jackendoff (1977), Akmajian and Lehler (1976)). その基本的な形式は「限定詞＋名詞 1 + of + 名詞 2」(以後 Det N_1 of N_2 と表示) であり、限定詞としては冠詞、数詞、属格名詞が現われ、その意味機能は N_1 が N_2 の数量を表わすものである。

- | | | |
|-----|------------------|----------|
| (1) | a piece of cloth | 1 片の布 |
| | a sheet of paper | 1 枚の紙 |
| | a slice of bread | 1 切れのパン |
| | a cup of coffee | 1 杯のコーヒー |
| | a glass of water | 1 杯の水 |

これらの表現における N_1 は、一般には、対応する日本語表現における「片」「枚」「切れ」「杯」などの助数詞 (counter) にあたると考えられて、英語を学ぶ際に、特定の数量を表わす表現としては、(1)のような基本的な表現のほかには、(2)の例中の a bar of, a cake of, a head of, a lump of のように、ぴったり適合するような日本語の助数詞がない (日本語の視点からすると「変わった」) 表現を覚えさえすればよい、と考えられがちである。

- (2) a bar of chocolate, a cake of soap, a head of lettuce, a lump of sugar

しかし、実際に英語でどのように擬似部分構造が使われているかを詳しく観察してみると、

これらは日本語の助数詞とは根本的に性質が異なるものであることが分かる。本稿では、英語における擬似部分構造がどのように基本形から派生形へと拡張して英語の表現力を豊かにしているかを考察する。第 2 節では擬似部分構造の N_1 の拡張について詳述し、第 3 節では N_1 の前に現われる種々の修飾表現について考察し、第 4 節で全体をまとめる。

2. N_1 の拡張

2. 1. 基本的な N_1

Alexiadou et al. (2007: 402)は、英語、フランス語、イタリア語、スペイン語、オランダ語、ギリシャ語などにおける擬似部分構造の詳細な研究に基づいて、擬似部分構造の N_1 として生ずる典型的な名詞類を以下のように整理している。

- (3) a. cardinal nouns (*dozen, million*)
- b. quantifier nouns (Greek *zevgari* ‘pair’, *arithmos* ‘number’)
- c. container nouns (*box, bottle*), group collective nouns (Greek *plithos* ‘crowd’; *sminos* ‘swarm’) or consistive/material nouns (Greek *buketo* ‘bunch’, *matsaki* ‘small sprig’)
- d. measure/unit nouns (*kilo*)
- e. partitive nouns (Greek *komati* ‘piece’, *feta* ‘slice’)

そして、これらの名詞類が共通にもつ特徴として、(i) 数量を表わす、(ii) 量化の対象を表わす名詞補部の存在を要求するという点で、関係を表わす (relational) ものである、を挙げている。(ii)の特徴について、Chierchia (1998: 72)は(4)のような具体例を挙げて次のように説明している。grain, stack, drop などの分類辞 (classifiers) は、of 句なしで用いられると奇妙であり、of 句なしで奇妙でない場合は、of 句が暗黙のうちに理解されている。

- (4) a. ?There were three grains on the floor.
- b. ?I saw four stacks.

2. 2. 語彙的拡張

擬似部分構造の N_1 として現われる(3)の名詞類のうち、(c)類と(e)類の具体例 box, bottle; piece などは、使用頻度が高く、習得の順序も早く、イディオレクト (個人語) による差異も少ないという点で、より基本的と考えられ、多くの先行研究でも N_1 の典型例として取り上げられている。しかし、 N_1 の位置に生起する名詞はこれらの基本的な語彙項目にとどまらず、より派生的な項目にも同じ用法が広がっている。たとえば、書物の数量を表わすのに、基本的な box に加えて、より派生的な shelf が使われたり、さらには、何かの入れ物とは考えにくい wall にまで拡張している(5)。wall は、ふつうは何かの入れ物とは考えにくい(5c)のように Det N_1 of N_2 の N_1 の位置に現われると、「壁一面の本」というように、 N_2 の数量を表わすことができる。これは、wall が語彙的意味の一部として数量の次元 (高さ

と幅の面的な広がり)を含んでいて、その wall が擬似部分構造 Det N₁ of N₂ の N₁ の位置に置かれると、その数量的な意味がこの構文の持つ「N₁ に規定される数量の N₂」という意味と呼応するからと考えられる。同様に、(6)のように、基本的な bottle の代わりにより特殊な flask が用いられることがある。(7)の furniture には、ふつう N₁ として piece を用いるが、場合によってはより派生的な(そして多くの場合、「粗末な」という意味合いなどが加わる) stick が用いられることがある。

- (5) a. a box of books
b. a shelf of books
c. She gazed at the wall of books.
- (6) a. a bottle of whiskey
b. a flask of whiskey
- (7) a. a piece of furniture
b. sticks of furniture

擬似部分構造の N₁ は、上述のとおり、基本的な語彙からより派生的な語彙へと数量用法を拡張していくのであるが、このような単純な語彙的拡張のほかにも、次節以下で見るような様々なタイプの拡張が N₁ に関して観察される。そして、それら各種の拡張が最も顕著なのは(3)の五つの名詞類のうち(c)と(e)である。以下、本稿ではこの二つの名詞類を中心に構文拡張の様相を見ていく。

2. 3. 比喩を伴う語用論的拡張

下記の例(8)では、avalanche が擬似部分構造の N₁ の位置に現われているが、この名詞は「多量」の意味に加えて、「突然の急速な動き」という付随的な意味要素を含んでいる。このような付随的な意味が数量の意味とともに擬似部分構造の N₁ の位置に持ち込まれたとき、「雪崩のような(突然襲ってくる数多くの)困難」、一般的には「N₁ のような N₂」という比喩的な解釈が生じる¹⁾。

- (8) He clearly had no stomach for *the sudden avalanche of problems*, along with the critical decisions needed now. (MC: 493-494)

擬似部分構造では、一つの名詞句の中に二つの異なる名詞が現われていて、これらが同じものを指すので、同一物の異なる視点からの描写となっている (Langacker (2009: 343, 363)). このため二つの名詞の意味を重ねあわすことが可能で、ここから比喩的效果が生じる。これに対して、a bunch of the men や a group of the men のような真の部分構造 (partitive construction) では、一つの名詞句の中に現われる二つの異なる名詞が同じものを指さず、N₁ (bunch, group) は N₂ (men) の部分を表わしているので、二つの名詞の意味を重ねあわすことができずに比喩的效果は生じない。(9)では、擬似部分構造の N₁ として、本来ガチョウのガアガア鳴く群れを指す gaggle という名詞が騒がしい女性客たちを表わすのに比喩

的に使われている。

- (9) She escorted Mr. Backman to a private parlor in the rear, away from *the gaggle of ladies* getting worked on in the front of the salon. Together, they studied colors and shades, and finally selected one that would be easy to maintain. (TB: 461)

(10)では、擬似部分構造の N_1 として、複合語の *alphabet soup* が使われている。*alphabet soup* とは、もとは「アルファベットの文字の形をしたパスタが入っているスープ」のことであるが、そこから比喩的に「頭文字を用いた略語」の意味で用いられるようになった語で、ここでは、「あんたは名前の後ろにごちゃごちゃとたくさんの文字 (MDなどの肩書き) が付いている頭のいい人なのだから、これくらい分るだろう」という意味で使われている。

- (10) “Like hell. You’ve got *an alphabet soup of letters* strung out behind your name. You’ve got all the smarts you need to figure this one out.” (TA: 263)

(11)は、ある短編のユーモラスな一場面を描いた部分からの抜粋であるが、ここでは、尼さんたちに引率されて横断歩道を渡っている子供たちの隊列が *a crocodile of small children* と描写されている。ここを読む読者は、ワニのようにくねくね、のそのそと進む子どもの列の様子を思い浮かべてにこっとする。ここで *a crocodile of* の代わりに、次の行で使われている *queue* を用いたならばこのようなユーモアを表現することはできない。最後のパラグラフで、一旦乱れた隊列を組みなおして進んでいく子供たちの様子を再び *crocodile* を用いて *The crocodile had now re-formed. . .* と表現しているが、ここでも読者はにこっとするであろう。

- (11) The last-mentioned [the Rolls Royce] came to a sudden stop at a pedestrian crossing in one of the poorer sections of the Old Kent Road. Richards let out a clucking noise of exasperation. Hanson looked out of the window. *A crocodile of small children* was crossing the road under the guidance of four nuns. Two were in the lead, the others bringing up the rear. At the end of the *queue* a small boy had stopped in the middle of the crossing and was staring with undisguised interest at the Rolls Royce.

He had a round and pugnacious face with a snub nose. . . . He looked up and caught sight of the distinguished silver head staring at him from behind the tinted window. Without hesitation the urchin wrinkled his face into a grimace, placed the thumb of his right hand to his nose and waggled the remaining fingers in defiance.

Without a change of expression, Timothy Hanson placed the thumb of his own right hand against the tip of his nose and made the identical gesture back at the boy. In the rear view mirror Richards probably caught sight of the gesture but after the flicker of one eyebrow stared straight ahead through the windscreen.

The boy on the crossing looked stunned. He dropped his hand, then grinned from ear to ear. In a second he was whisked off the crossing by a flustered young nun. *The crocodile* had now

re-formed and was marching towards a large grey building set back from the road behind railings. Freed of its impertinent obstacle, the Rolls purred forward on the road to Kent.

(NC: 271-272)

2. 4. 形態論的拡張— -ful, -load

擬似部分構造の N_1 として現われる特徴的な語形として、名詞に -ful, -load のついたものがある。特に -ful は多くの名詞に付き、たとえば『プログレッシブ英語逆引き辞典』では、armful から wineglassful まで全部で 79 の名詞が挙げられている。OED（接尾辞 -ful の項）には bottleful, boxful, canful, spoonful などばかりでなく、bookful, churchful, houseful, worldful なども挙げられている。

実際の言語資料で full/-ful の用法を見ると、まず、 N_1 full of N_2 の例は、 N_1 が意味的主要部の解釈（「 N_2 で一杯の N_1 」）と N_2 が意味的主要部の解釈（「 N_1 一杯の量の N_2 」）のどちらともとれる場合が多い。たとえば(12)は、学校で宇宙ロケットをつくるために空き箱などを持ってくるように言われた子供（Larry）のために、母親が洗剤の空き箱やプラスチックの空き瓶などを集めて買い物袋に詰めて用意していたところに、子供の友達（Roy）が同じような袋を持ってやってきた場面であるが、a shopping bag full of cartons は、「空き箱で一杯の買い物袋」とも「買い物袋一杯の空き箱」とも解釈できる。

(12) Like Larry, Roy had a shopping bag full of cartons.

(CZ: 56)

N_1 full of N_2 が持つこのあいまいさのために、(13)のような興味深い文が生じる。(13)の a water glass full of whiskey は、主節においては had...beside him の目的語であるので N_1 (water glass) が主要部で、関係節においては kept sipping at の目的語であるので N_2 (whiskey) が主要部である、と考えるのが自然であろう。

(13) He had a water glass full of whiskey beside him which he kept sipping at.

(GF: 266)

しかし一方で、(14)の諸例のように、文脈からはっきりと N_2 が主要部であると考えられる例もあるので、現代英語において、 N_1 と full が複合語化して N-ful のように 1 語になった場合ばかりでなく、 N_1 と full が 2 語のままで N_2 が主要部である擬似部分構造として機能する場合がある、と考えてよいであろう。

(14) a. Now girls have the option on a pocket full of hopes too.

(BNC: CGC 1238)

b. Examples of an article 'intended' for use as an offensive weapon include a dart which the accused intends to throw in a football crowd or a pocket full of stones which the accused intends to throw at members of a rival demonstration.

(BNC: CE2 2730)

c. Luke still had a pocket full of the change he had stolen yesterday.

(CZ: 286)

N_1 と full が複合語化せずに2語のままで擬似部分構造としての機能を持つことが可能であるために、 N_1 自身が複合名詞で実現されたり(12), (13), (15), さらに、(16)のように N_1 が句によって実現されることも可能になる。

- (15) a. Alex had *a home safe full of cash*. (TA: 433)
(家庭用金庫一杯の現金)
- b. The ads run coast to coast—quickie ads that'll scare folks and make them dial your toll-free number right here in D.C., where you have *a warehouse full of paralegals* answering the phones and doing the grunt work. (KT: 1152)
(電話にこたえて単調でつまらない仕事をしている倉庫一杯の弁護士補助員たち)
- c. I had *a back pocket full of readies* as I planned on doing some Christmas shopping while up West and I had no intention of joining the Christmas Eve rush to the lingerie departments of the big stores, so the first thing was to get away from the temptation of the HMV shop. (BNC: HTL 1840)
(ズボンの後ろポケット一杯の現金)
- (16) a. He took it up front where Oscar was shuffling paperwork for *a whole room full of prospects*. (KT: 329)
(部屋一杯の顧客になってくれそうな人たち)
- b. Of course, yes, he's not even, perhaps he'll bring *the other pocket full of petit fours*. (BNC: KBK 2791)
(もう一方のポケット一杯のプチフル)

さらに、 N_1 full of N_2 に擬似部分構造としての機能があるため、擬似部分構造一般に見られる of N_2 の省略 (N' Deletion/N' Anaphora) (Jackendoff (1977:115), 梶田(2005: 370-371)) が N_1 full of N_2 に見られることがある。(17)の There's a freezer full.は、先行文中の ice cream を補って「冷凍庫一杯のアイスクリームがあるのに」と解釈され、a freezer full of ice cream の of 以下が省略されている文である。

- (17) "I'm going out," Davee informed her.
"This time o'night?"
"I want some ice cream."
"There's *a freezer full*."
"But none of the flavor I'm craving." (TA: 486)

実際にどういう名詞が入れ物を表わすものとして-ful と結びついて複合語をつくるかについては、単語の語彙的意味のみでなく、その名詞が指すもので実際に何かの量を量れるか否かという語用論的な考慮が関わっているようである。たとえば、cup, spoon などが入

れ物として-ful と結びつくのはそれらの語彙的意味からして自然であるが, (18)では, 入れ物とは考えにくい fork が-ful と結びついた forkful が使われている.

- (18) After he finished his soup, his wife placed a small steak before him with *a few forkfuls of green spinach* oozing yellow oil. (GF: 258)

身体の部分を目指す hand や mouth は入れ物として「一つかみ, 一握り」, 「一口」というように量を表わすことができるのに対し, foot や leg は何かの入れ物としてその量を表わすとは考えにくいので, -ful と結びついて複合語を形成することはないと予測できる. では eye, ear, nose はどうであろうか. eyeful は(19a)のように, 「(ごみ, しぶき, 目薬などの) 目に入った量」を表わしたり, (19b)のように, 「... をたくさん見る」という目の働きの量を表わすことがある. earful はもっぱら(19b), (20)のように, 「... をたくさん聞く」という耳の働きの量を表わす. nose は何かの入れ物とは考えにくい, noseful となって(21)のように, 「1 回の嗅ぐ量」を表わすことがある.

- (19) a. Use one of the proprietary woodworm injectors for this, as their special nozzles are designed to fit the holes and you are less likely to risk *an eyeful of the fluid*. (BNC: CCY 1557)
b. By the time the draw takes place the audience will have had *an eyeful of Loren* and *an earful of Pavarotti*, who was once a deep-lying centre-forward and is now roughly the same shape as the ball. (BNC: A9H 638)
(20) Anyone tuning in will just get *an earful of 'white noise'*. (BNC: CH5 5238)
(21) It had been child's play to hire a junkie for the price of *a noseful of cocaine*. (WG: 378)

-load は-ful ほど自由ではないが, 人や物を入れて／のせて運ぶものを表わす名詞と複合語を形成して, N_1 -load of N_2 という擬似部分構造を構成し, 「 N_1 にのせられる量の N_2 」という意味を表わす. たとえば, a busload of tourists は「バス一台分の旅行者」を表わす. おもなものを挙げると, armload, boatload, carload, cartload, coachload, lorryload, planeload, shipload, trainload, truckload, wagonload などがある. N_1 -load of N_2 にも擬似部分構造一般に見られる of N_2 の省略が見られる. たとえば, (22)では a small truckload の後ろに of liquorice-tasting alcohol を補って解釈しなければならない.

- (22) Hagen switched bottles and poured them both a portion of the fiery, liquorice-tasting alcohol. It was peasant, homemade stuff, much stronger than that sold in stores, the gift of an old friend who every year presented the Don with *a small truckload*. (GF: 275)

2. 5. 統語論的拡張 I — 他動詞＋目的語構文から

下記(23)のような表現における N_1 はすべて行為を表わす名詞であり、同形あるいは関連した語形他動詞が存在する。そしてそれらの他動詞には、(i) 目的語としてその動詞の表わす行為の影響を受けるもの (patient) をとる、(ii) have, take, get などの意味の軽い動詞を用いて have/take/get a ... of という複雑述語 (complex predicate) で言い換えができる、という特徴がある。たとえば、他動詞 sip は目的語として tea などを取り、take/have a sip of tea と言い換えられ、他動詞の bite は目的語として steak などを取り、take / have a bite of steak と言い換えられる。

(23) a bite of steak, a drink of brandy, a gulp of milk, a sip of tea, a sniff of tea, a swallow of wine

これらの動詞は目的語の表わすものに影響を与えることによってその量を決定することができると考えられる。たとえば、お茶を一回すすればお茶の(大体の)量が決まり、ステーキを一口噛みきればその(大体の)量が決まる。そのためにこれらの動詞に対応する名詞が擬似部分構造の N_1 になれる。ちょうど、a cup of coffee において、入れ物がその中身の量を決めることができるので擬似部分構造の N_1 になれるように、これらの行為を表わす名詞が擬似部分構造の N_1 になれるのである。

(23)のような表現は、各種の辞書によればほとんどの場合に take, have などの軽動詞とともに用いられると記述されており、そのような場合には、動詞句中の Det N_1 of N_2 が量を表わすというより、動詞句全体として行為を表わすと解釈されよう。しかしこのような形で繰り返し使用されているうちに、Det N_1 of N_2 という形式で N_2 の量を表わすという構文の力が働いて、Det N_1 of N_2 の部分が数量表現として独立し始め、take, have などの軽動詞から離れて現われたり(24)、他の動詞の目的語として現われたりするようになる(25)。この段階では(26)のような再分析が行われていると考えられる。

(24) A sip of tea and Teddy said, 'Where's Backman right now?' (TB: 9)

(25) Clay cut a bite of steak. (KT: 230)

(26) [[take a bite of][steak]] → [[take] [a bite of steak]]

このような数量表現としての確立の度合いは個々の項目ごとに異なっている。たとえば a sip of, a bite of などでは、実例の(24), (25)に見られるように、かなり進んでいるようで、インフォーマントの判断によれば、(27), (28)なども自然であるとのことである。(a) swallow of が take 以外の動詞の目的語として現われている例は、BNC では皆無であるが、Google search をしてみると、(29a)のように come の主語として現われたり、(29b-d)のように encounter, put, give などの目的語として現われたりと、take から独立して機能している例が多数見られる。このような状況から a swallow of が数量表現として現在確立しつつあることがうかがわれる。

(27) a. John stepped on a bite of steak.

- b. John *threw away a bite of steak*.
- (28) a. John *left a sip of tea*.
 b. John *offered me a sip of tea*.
 c. John *threw away a sip of tea*.
- (29) a. If you try to eat and talk at the same time, the epiglottis doesn't get warning of *the coming of a swallow of food* in time to cover the opening of the windpipe, and the food goes down the wrong way and you cough and choke.
 (http://www.enotalone.com/article/12833.html)
- b. A look at the special assignments of rennin, pepsin, hydrochloric acid, and mucus—and how they interact with and depend upon one another—provides a good glimpse into the elegant and complex chemical events that occur when the stomach *encounters a swallow of food*.
 (http://www.faqs.org/health-encyc/Your-Body/The-Digestive-System-and-the-Liver-The-stomach.html)
- c. *Put a swallow of water* in your mouth (but don't swallow it!). Tilt your head back, open your mouth, drop in the pill and then swallow.
 (http://www.drug3k.com/forum1/First-Aid/What-039-s-the-easiest-most-effective-method-of-swallowing-a-tablet-26611.htm)
- d. *Give babies a swallow of water*. Have your child lie down. Drink water slowly.
 (http://hiccups.org/)

2. 6. 統語論的拡張Ⅱ — 主語＋非対格自動詞構文から

下記の例(30), (31)に見られるように, *trickle*, *growth* のような名詞が擬似部分構造の N_1 として生起することができる。これらの名詞は, 同形または関連した語形の動詞が存在するという点で上述の *bite* などと類似しているが, これらは *bite* などと異なって, 行為というよりはものの動きあるいはその結果生じたものを量とともに表わしていると言える。たとえば, (30a), (31a)の斜体部はそれぞれ, 「滴り落ちる少量の血液」, 「無精ひげを一日延ばし放題にした結果生じた量の無精ひげ」を表わす²⁾。そして, *bite* などが対応する他動詞構文の目的語を N_2 として取るのに対して, *trickle*, *growth* は対応する非対格動詞の自動詞構文の主語を N_2 として取る。*trickle*, *growth* に対応する動詞にはそれぞれ *Blood trickled*, *Stubble grows fast* などの自動詞構文があり, その主語に対応する名詞が擬似部分構造の N_2 として現われている。

- (30) a. Marco noticed *a trickle of blood* on her left knee. (TB: 309)
 b. In the last hour, *a steady trickle of people* had passed by on the path below. (SS: 13)
- (31) a. His clothes reeked of smoke and were in tatters, and *a day's growth of stubble* covered his face. (SL: 126)
 b. He had no beard or moustache, just *a heavy growth of dark stubble*. (CZ: 6)

同種の他の例としては(32)のようなものが挙げられる³⁾。

- (32) a. For a lot of people, he'd all but killed *whatever dribble of peace and love* had reached this far north. (BB: 26)
- b. Marco braced for *a jolt of foot odor* but then realized it had little chance of competing with the cheap perfume. (TB: 395)
- c. Lesley walked to the microphone as the chairperson retreated from it to *a spatter of applause*. (BNC : BP8 1556)
- d. Immediately above us, though, we can see *a sprinkle of stars* coming out shyly to pepper the desert skies. (BNC: HH0 6)
- e. It was a Wednesday, the middle of the week, so there were many businessmen and military types in uniform, but few tourists, and only *a sprinkling of women and children*. (CZ: 101)
- f. Staff there see *a constant stream of people* suffering injuries which just need not have happened. (BNC: K1U 558)

2. 7. 統語論的拡張Ⅲ— 構文の代入

擬似部分構造により数量が多いことを表わそうとする場合、通常、(i) N_1 として、「多量」の意味を持つ名詞を用いたり(33), (ii) N_1 の前に、「多量」の意味を表わす修飾語句を用いたりするが(34), これらのほかに特別の形として、(iii) N_1 の位置に、「多量」の意味を表わす N after/upon N , N_{pl} and N_{pl} のような統語構造を用いることができる(35), (36) (N after/upon N 構文については, Jackendoff (2008), Matsuyama (2004, 2006), 大名(2004)参照)⁴⁾。これは、擬似部分構造の N_1 の位置が複数名詞句であるとき、これに同じく複数の意味を表わす N after N などの構文を代入した結果と考えることができる。

(33) a lot of, lots of, plenty of, an abundance of, an army of, a barrage of, a deluge of, dozens of, a flood of, a heap of, a horde of, a host of, legions of, loads of, a mass of, a mountain of, a multitude of, an ocean of, a pile of, a plethora of, a profusion of, scores of, a sea of, a stack of, a swarm of, tons of, a torrent of, etc.

(34) a large amount/quantity of, a great deal of, a large number of, etc.

- (35) a. At midnight, Marco was in his bed, in his cold room, wrapped tightly with the thin blanket, sipping orange juice he had ordered himself, and memorizing *list after list of verbs and adjectives*. (TB: 150)
- b. It passed *block after block of postwar apartment buildings* packed tightly together, with wide avenues separating them. (TB: 213)
- c. The boss's office looked as chaotic as any other part of the station: packing cases still waiting to be filled and labelled, half-empty shelves, ancient green filing cabinets with their drawers open, displaying *acre upon acre of paperwork*, all of which would have to

- be shipped out in some semblance of order. (BB: 28)
- d. Closer inspection revealed these all contained *roll upon roll of \$100 bills, US*. (GN: 335)
- (36) a. He flipped *pages and pages of documents*, hitting the high points of the legalities, collecting her signatures where necessary. (KT: 138)
- b. He gazed across the field to *the rows and rows of Reedsburg fans* and wondered who had jobs and who did not. (KT: 425)

3. N₁ 前の修飾表現

第2節では、擬似部分構造の N₁ が基本的なものから様々な方向に拡張して多種多様な数量表現を可能にしていることを見た。本節では、N₁ の前に様々な修飾表現を置くことによって、many, much; a few, a little などの単純な数量詞や copious, numerous, multitudinous, plentiful; meager, scanty, scarce などの形容詞では表わし分けることができない多種多様な数量表現が可能になることを見る。3.1 節では N₁ の前に形容詞 (句) が現われる場合を見、3.2 節では N₁ の前に断定を避けるヘッジ表現が現われる場合を見る。

3. 1. N₁ 前の形容詞 (句)

Det N₁ of の数量を表わす力が弱い場合には、それを強化するような修飾語句が N₁ の前に付けられることがある。たとえば、(37a, b)では N₁ の list にそれぞれ形容詞の endless, entire が付いて単なるリストではなく「多量の」という意味を強めている。(37c)では N₁ の wall に whole が付いて「壁一杯の」という量を表わしている。table は、ふつう数量を表わすものとは捉えられないが、(38)では long が付くことによって、「長いテーブルに向かって座っているたくさんの弁護士や弁護士補助員、陪審員 (選任についての) エキスパートたち」を表わすことができる。

- (37) a. As Critz feverishly worked the phone, he marveled once again at *his endless list of contacts*. (TB: 131-132)
- b. With an improving accent, he rattled off *the entire list of polite expressions* —good day, how are you, fine thanks, please, see you later, goodbye, good night—and thirty others. (TB: 112)
- c. There were half a dozen keys on the chain. One of them opened the main door. In the well-lit lobby there was *a whole wall of letter-boxes*. (BB: 22)
- (38) The photographer sat in a chair against the back wall, facing *the long table of lawyers and paralegals and jury experts*. (RJ: 4-5)

N₁ の前に現われる形容詞 (句) は数量を表わすという擬似部分構造の機能に合致するものでなければならない。どのような形容詞 (句) が可能かを調べるために、Scott (2002) の形容詞の意味による分類を参照する。Scott は名詞前の位置に現われる形容詞の意味類の順

序付けには通言語的な規則性が見られることを観察し、この観察に基づいて形容詞を支配する機能範疇の間に(39)のような普遍的階層関係を提案している (Scott (2002: 109,114))⁵⁾.

- (39) SUBJECTIVE COMMENT>?EVIDENTIAL/UNIVERSAL COMMENT>SIZE>LENGTH>HEIGHT>
SPEED>?DEPTH>WIDTH>WEIGHT>TEMPERATURE>?WETNESS>AGE>SHAPE>COLOR>
NATIONALITY/ORIGIN>MATERIAL

a cup of coffee を例として取り上げ、cup の前にどのような種類の形容詞が可能かを見てみる。この句が see の目的語として機能している場合 (a cup of coffee は主要部+補部の構造を持つ) と、drink の目的語として機能している場合 (a cup of coffee は擬似部分構造である) を調べてみると次のような結果が得られる。

- (40) He saw a [beautiful (主観的コメント) / famous (普遍的コメント) / large (サイズ) / long (長さ) / tall (高さ) / #fast (スピード) / deep (深さ) / wide (幅の広さ) / heavy (重さ) / hot (温度) / wet (湿気) / old (新旧) / square (形) / yellow (色) / French (起源) / plastic (材料)] cup of coffee.
(41) He drank a [large (サイズ) / tall (高さ) / hot (温度)] cup of coffee.

(40)に見られるように、a cup of coffee が see の目的語として機能しているとき、(なかには fast のように判断が微妙な場合もいくらかあるが) ほとんどすべての意味類の形容詞が現われることができる。これに対し、(41)に見られるように、drink の目的語として機能しているとき cup の前に現われてごく自然なのはサイズ、高さを表わす形容詞である。これらの形容詞は、入れ物としての cup の大きさを規定することによって間接的に中身の液体の量を規定することになるので、擬似部分構造の量を表わすという機能とうまく合致している。cup が美しいか有名であるか新しいか古いか、形や色や起源がどうであるかなどは中身の液体の量とは無関係であるので、擬似部分構造の N₁ としての cup の前に現われるのは不自然である。

(41)で温度を表わす形容詞 hot が可能であるが、この形容詞は N₁ の cup を修飾するものではなく N₂ の coffee を修飾するものである。ここでは統語形式上 N₁ を修飾する位置に意味的には N₂ を修飾する要素が現われているのである。この現象自体はすでに多くの研究者によって指摘されており(42)、また実際にもよく観察される(43)。

- (42) a. a *useless* couple of days (Jackendoff (1977: 129))
‘the days were useless’
b. a *marvellous* glass of wine
‘the wine is marvellous’
c. a *nice* box of cigars
‘the cigars are nice’
d. a *tasteless* cup of coffee
‘the coffee is tasteless’ (b-d は Alexiadou et al. (2007: 398)より)

- (43) a. I've never seen a *more volatile* set of facts. (KT: 468)
 'the facts are more volatile'
 b. . . . then nonstop brainwashing from a *tough* group of counselors who've all been exactly
 where they've been. . . . (KT: 38)
 'the counselors are tough'
 c. How sad that after four tumultuous years of leading the free world it would all fizzle into
 one *miserable* pile of requests from a bunch of crooks. (TB: 2)
 'the requests are miserable'

これらの例を形容詞の意味類の観点から子細に調べてみると、擬似部分構造の N_1 前に現われる主観的／普遍的コメントを表わす形容詞（句）はほとんどの場合に、 N_1 をいわば通り越して N_2 を修飾していると言える。なぜこのようなことが可能かという、a cup of のように擬似部分構造としてすでに確立した表現は、cup が名詞であるという性質は保持しているのでそれを利用してその前に形容詞を置けるが、機能的には many, much などの数量詞と同様の働きを持つので N_1 を無視して N_2 を修飾することができるのであろう。

2.5 節でみた take/have a bite of や take/have a sip of など N_1 の前に形容詞をとることができるが、これらの形容詞には興味深い制限が見られる。(44)が示すように、可能な形容詞類は、(i) N_1 を修飾するサイズを表わす形容詞であるか(44a), (ii) 動詞句全体を修飾する様態の副詞に対応するような形容詞(44b)に限られており、上述の N_2 を修飾する形容詞は不可能である(44 c, d).

- (44) a. John took/had a *big* bite of steak.
 b. John took/had a *careful* sip of coffee.
 ('John took a sip of coffee carefully.')
 c. *John took/had a *strong* sip of coffee.
 (Cf. John drank a *strong* cup of coffee.)
 d. *John took/had a *hot* sip of coffee.
 (Cf. John drank a *hot* cup of coffee.)

下記の例(45a)の擬似部分構造 a very quiet bottle of champagne では、行為ではなく入れ物を表わす bottle の前に動詞句全体を修飾する様態副詞に対応するような形容詞句 very quiet が現われている。このような例は、(44b)のような「take/have + a + 様態形容詞 + 行為名詞 + of」をモデルとして拡張した結果可能になったものと考えられる。このようなモデルの存在なしに一足飛びに have a quiet bottle of champagne のような表現が生じることは考えにくい。そして、一旦 have a quiet bottle of champagne が可能になると、次の段階では a quiet bottle of champagne が軽動詞 have から独立して、他の動詞の目的語の位置に現われた(45b)のような表現が可能になる。

- (45) a. When the supreme court there eventually awarded him the state's three electoral votes, he
 and Critz *had a very quiet bottle of champagne*. (TB: 3)

- b. Parents have the option of taking advantage of our babysitting services, so why not *enjoy a quiet bottle of champagne* on the beach or sneak off to dinner for two at one of the nearby restaurants.

(<http://www.wotif.com/hotel/View?hotel=W73755>)

3. 2. N_1 前のヘッジ表現

下記の例(46)では擬似部分構造の N_1 として一種の関係節が現われている。このような関係節の *what appeared to be* の部分は様々な根拠から格下げされたヘッジ表現とみなされている (Wilder (1999))。これらの表現が用いられることにより、単に「約 30 ページ」, 「何マイルも続く」と断定するのではなく, 「約 30 ページほどに見えた」, 「何マイルも続くように見えた」というようにきめ細かく数量を表わすことを可能にしている。

- (46) a. She tossed the few items of clothing into the backseat, then pulled out *what appeared to be approximately thirty pages of paper* and a single snapshot encased in a plastic evidence bag. (SL: 187)
- b. The sidewalks were centuries old and covered with *what appeared to be miles of arching porticoes*. (TB: 151)

4. おわりに

以上、本稿では、現代英語の擬似部分構造がその基本形から多様な変種を派生していく過程を見てきた。単純な語彙的拡張のほかに、比喩を伴う語用論的拡張、附属形式を付加する形態論的拡張、複数の構文が相互に影響しあう統語論的拡張などが観察された。統語論的拡張には、他動詞＋目的語構文からの数段階の拡張、主語＋非対格自動詞構文の名詞化、「名詞＋前置詞／接続詞＋名詞」構文の N_1 への代入などいくつかの拡張経路がある。さらに、 N_1 の前に修飾語句を付加して数量の意味をより精確にしたり、数量に関する判断の保留を表現したりすることもできる。 N_1 前の修飾語句は N_1 にかかる場合と N_2 にかかる場合の両方があり、その意味と用法は構文拡張の経路によって異なる。

このように現代英語は名詞による数量の表現に関して非常に多様な可能性を持ち、その点で、ごく限られた可能性しか持たない日本語と際立った対照を見せている。日本語では、英語の N_1 に対応する「片」、「枚」、「杯」などの助数詞類のメンバーが限られており、その限られた数の助数詞も数詞以外との結合の可能性をほとんど持たない。そのために、語彙的な拡張や比喩を伴う語用論的拡張の可能性はない (an avalanche of problems, a crocodile of children など)。「1 枚の紙」と同じ形式で表現することはできない。ましてや、「枚」などに形容詞やヘッジ表現を付けたりすることはできない。これに対して、英語の擬似部分構造 $\text{Det } N_1 \text{ of } N_2$ は、 $\text{DP} \rightarrow \text{Det} + \text{NP}$, $\text{NP} \rightarrow \text{N} + \text{PP}$, $\text{PP} \rightarrow \text{P} + \text{DP/NP}$ などの句構造規則 (またはそれに相当するなんらかの仕組み) の自由な組合せによって形成されたものなので、その N_1 の位置に様々な種類の名詞を挿入したり、 $\text{NP} \rightarrow \text{AP} + \text{NP}$ のような句構造規則を適用して N_1 の前に形容詞やヘッジ表現を付けることも当然可能になる。「1 枚の紙」、a piece of paper

などの基本形の間のこのような日英語の相違が構文拡張の仕組みの可能性と働きあって、名詞による数量表現の可能性に上述のような大きな差異をもたらしている。

注

- 1) 以後、引用例中のイタリック体は問題としている部分を目立たせるためであって、原文ではローマン体である。出典については、論文末の出典一覧参照のこと。
- 2) 単に a growth of だけでは数量表現としての機能を果たすのに不十分なためか、ほとんどの場合に、growth の前に a day's のような期間を表わす表現か heavy, thick, dark などの形容詞を伴っている。
- 3) ものの動きとともに量を表現することは英語の顕著な特徴の一つであり、本文で扱った N_1 が対応する非対格自動詞構文を持つ場合に限らず、非常に多くの例が見られる。具体例は梶田(2005)参照。
- 4) 逆に数量が少ないことを表わす方法には、(i) N_1 として「少量」の意味を持つ名詞を用いる (an atom of, a bit of, a crumb of, a dab of, a dash of, a drop of, a dollop of, a fraction of, a ghost of, a grain of, a hint of, an iota of, a matter of, a modicum of, a morsel of, a particle of, a semblance of, a shade of, a shred of, a speck of, a taste of, a touch of, a trace of, a trifle of など), (ii) N_1 の前に「少量」の意味を表わす修飾表現を用いる (a small amount/quantity of, a small number of, a small dose of など) 方法があるが、 N_1 として「少量」の意味を表わす統語構造は見当たらない。
- 5) (39)の機能範疇名のまえに？が付されているものは、このような機能範疇を設けてこの位置に置くことについて確からしさの度合いが低いと考えられているものである。

出典一覧

- Brown, S. (1999) *The Alibi*, Warner Books, New York. (TA)
- Carrell, J.L. (2007) *The Shakespeare Secret*, Sphere, London. (SS)
- Follett, K. (2000) *Code to Zero*, Pan Books, London. (CZ)
- Forsyth, F. (1982) *No Comebacks: Collected Short Stories*, Corgi Books, London. (NC)
- Grisham, J. (1996) *The Runaway Jury*, Arrow Books, London. (RJ)
- Grisham, J. (2003) *The King of Torts*, Bantam Dell, New York. (KT)
- Grisham, J. (2005) *The Broker*, Arrow Books, London. (TB)
- Hailey, A. (1975) *The Moneychangers*, Bantam Books, New York. (MC)
- Puzo, M. (1969) *The Godfather*, Pan Books, London. (GF)
- Rankin, I. (1998) *Black and Blue*, Orion Books, London. (BB)
- Rosenberg, N.T. (2004) *Sullivan's Law*, Pinnacle Books, New York. (SL)
- Sheldon, S. (1987) *Windmills of the Gods*, HarperCollins, London. (WG)
- Wolstencroft, D. (2005) *Good News, Bad News*, Hodder and Stoughton, London. (GN)

参考文献

- Akmajian, A. and A. Lehrer (1976) "NP-Like Quantifiers and the Problem of Determining the Head of an NP," *Linguistic Analysis* 2, 395-413.
- Alexiadou, A., L. Haegeman and M. Stavrou (2007) *Noun Phrase in the Generative Perspective*, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Chierchia, G. (1998) "Plurality of Mass Nouns and the Notion of 'Semantic Parameter'," *Events and Grammar*, ed.

- by S. Rothstein, 53-103, Kluwer, Dordrecht.
- Jackendoff, R. S. (1977) *X-bar Syntax: A Study of Phrase Structure*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Jackendoff, R. S. (2008) “*Construction after Construction* and its Theoretical Challenges,” *Language* 84, 8-28.
- 梶田幸栄 (2005) 「英語の擬似部分構造」今西典子他編『言語研究の宇宙』 367-378, 開拓社, 東京.
- Langacker, R. W. (2009) *Investigations in Cognitive Grammar*, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Matsuyama, T. (2004) “The N *after* N Construction: A Constructional Idiom,” *English Linguistics* 21, 55-84.
- Matsuyama, T. (2006) “A Note on the Two-Sided Behavior of N *after* N,” *English Linguistics* 23, 446-453.
- 大名力 (2004) 「コーパスからデータが得やすい構文, 得にくい構文— a beautiful two weeks と book after book を例に」『英語コーパス研究』 11. 185-198.
- Scott, G.-J. (2002) “Stacked Adjectival Modification and the Structure of Nominal Phrases,” *Functional Structure in DP and IP*, ed. by G. Cinque, 91-120, Oxford University Press, New York.
- Selkirk, E. (1977) “Some Remarks on Noun Phrase Structure,” *Formal Syntax*, ed. by P. W. Culicover, T. Wasow and A. Akmajian, 285-316, Academic Press, New York.
- Wilder, C. (1999) “Transparent Free Relatives,” *Proceedings of the 17th West Coast Conference on Formal Linguistics*, 685-699.

辞書・コーパス

- The British National Corpus* (<http://www.natcorp.ox.ac.uk>). (BNC)
- The Oxford English Dictionary*, Second Edition on CD-ROM, 2007, Oxford University Press.
- 『プログレッシブ英語逆引き辞典』 1999, 小学館.